

道一筋 実を結ぶ



「今後も誠意を込めて仕事を続けたい」と語る
藤岡恭子さん

藍綬褒章

小売物価統計調査員

藤岡 恭子さん(65)

＝松山市衣山5丁目



対象者が「普通の生活」を送れるよう見守ってきたという
長井文明さん

藍綬褒章

保護司

長井 文明さん(75)

＝上島町弓削下弓削

心に寄り添い更生導く

相手の話をじっくり聞き、信じてくれることが信条。二度と法に背かないよう職場や生活などの悩みに寄り添い、更生に導いてきた。「長く続けてきたただけだが、後進の励みになれば」と受章をかみしめる。

34年間、保護司を務めた父親が勇退した1989年、後任の勧めがあった。荷が重たいといったん断ったが、教会教師を務める金光教の「人の難儀を助けるのがありがたいと心得て精進せよ」との教えに沿い、父親と同じ奉仕の道を進んだ。

以来、対象者の問題に親身になってきた。月に何度も面会したり、就職先に同行したり。家族からの相談にも乗った。「保護観察期間が終わり感謝されると、やはりうれしい」

犯罪や非行のない地域を築く

「社会を明るくする運動」にも強い思いがある。小中高校や高等専門学校に出向き、PTAなどに啓発。地元の夜市イベントにも出店してアピールし、住民理解を少しずつ広げている。

更生とは「普通の生活を送ること」と言う。結婚や、仕事に頑張る姿を見ることが何よりの励みとなっている。

(月岡岳)

月40店訪問 誠意の24年

「受章は気恥ずかしい」。24年間にわたり小売物価統計調査員を務めた功績にも謙虚で「誠意を込めて仕事をしてきただけ」とほほ笑む。同調査員は知事から任命を受けた特別職の地方公務員。消費生活で重要な商品やサービスの料金などを毎月調べ、物価水準の変動を表す消費者物価指数の算出に生かしている。

調査に携わってきた。毎月約40店舗を3日間で訪問し、1日1万歩近く歩くことも。面識のないマンションの住民に家賃を聞く「飛び込み営業」のような仕事もあった。「体力、精神的に大変だけど、始めるといつも無事に終えられた」

身だしなみや言葉遣い、にこやかな表情を意識し続けたという。約10年前に訪問先の小売店は「頑張りたい」(高田未来)

2年前、家庭の事情で辞めようとし、同僚の調査員から止められた。「認められたようだった。体が元氣な限りは頑張りたい」

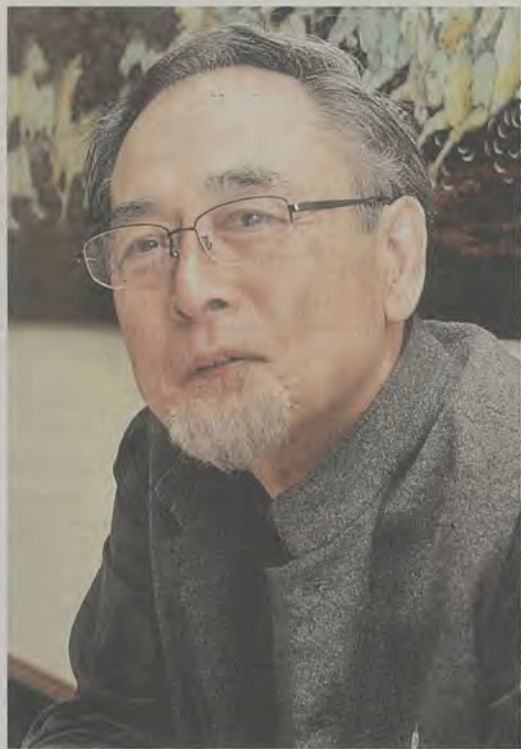
政府は28日付で2016年春の褒章受章者を発表した。愛媛県関係は1団体と5人。内訳は社会に奉仕する活動に従事した団体への緑綬褒状が1団体、業務に精励した人への黄綬褒章が2人、公益に尽力した人への藍綬褒章が3人。受章者の功労を紹介する。(7面参照)

春の褒章

受章者の横顔



「ないものを造りたい」という思いで開発に取り組んできた」と話す
仲野 整さん



「料理人として育ててくれた先輩に感謝している」と語る
大岩 行雄さん

黄綬褒章

元日本キャリア工業社長

仲野 整さん(72)

＝松山市南久米町

黄綬褒章

雁飯店代表取締役

大岩 行雄さん(68)

＝松山市木屋町2丁目

料理の魅力奥行き無限

県内の中国料理界をリードし、優れた技術と指導力を持つ「愛媛マイスター」にも認定された。「技能の向上に努めてきたことが評価された。料理人という裏方の仕事に光が当たることで、後輩の励みになればうれしい」と受章を喜ぶ。

高校卒業後、大阪市のホテルでフランス料理を3年間修業。その後、兄が経営する県外の中

国料理店でも働いて、現在の雁飯店を開いた。本格的に中華を学ぶため、東京の料理学校で、日本に四川料理を広めた故陳建民氏らの教えを受けた。

「奥行きが無限で、見えないところに引かれた。追求すればするほど面白い」と料理の魅力を語る。フランス料理のように洋風食器に盛り付けて1品ずつ提供する新しい中華の考え方を

取り入れ、新ジャンルにも挑戦してきた。

料理教室の講師を務めるなど、店外での活動にも尽力している。「技術を磨くには、人柄など精神面が重要になる。料理人の心を次の世代へバトンタッチしていきたい」と今後も中国料理の発展のため腕を振るい続ける。

(渡部竜太郎)

「ないものを造る」に心血

均等にスライスされ折り畳まれた状態で、機械から出てくる薄切り肉。1970年に日本キャリア工業(松山市)を創業し、開発した折り畳み装置付きの食肉スライサーは、スーパールの精肉コーナーなどを支えている。

創業以来、多様な食肉加工機を開発し「ないものを造る」と心に心血を注いできた。受章の知らせには「夢にも思っていない

かった」と喜ぶ。

主力の食肉スライサーは機械に付着しやすい生肉をどう折り畳むかに難儀したが、10年かけて開発に成功した。食肉の折り畳みはそれまで手作業で行わなければならず、危険も伴っていたが、自動化することで安全性の向上に貢献した。

2002年の販売開始から、これまでに550台以上を売り上げた。九州や東京への事務所開設など会社の事業拡大にもつなげた。

13年7月に会長に就き、経営の第一線を退いた後は絵画に目覚めた。会社のマスコットに幻の動物「ツチノコ」をデザインし「夢のような機械を開発してほしい」と後進への期待を寄せられている。

(岩田太)